

能登半島地震における女性支援活動 報告書

地域防災女性ファシリテーター・大阪

1. 実施結果

大阪男女いきいき財団有志と地域防災女性リーダー育成事業修了者が被災地の支援活動を行った。

■1回目 令和6年7月12日(金)～14日(日) 支援活動者数:13人

場所:七尾市矢田郷コミュニティセンター避難所及び輪島市大屋小学校避難所

矢田郷コミュニティセンター避難所では、居住スペースのレイアウト変更に合わせての清掃活動、150人分の炊き出し(スタッフやボランティア分含む)、茶話会、ワークショップ(火を使わないお灸、ハンドトリートメント、虫よけスプレーづくり)を実施した。避難者数:54人



大屋小学校では、上記のワークショップを体育館で実施。その後は、避難所運営者に発災時からの運営の実情と今後のニーズ等をヒアリングした。避難者数:避難所に30名、仮設住宅には48世帯。



■2回目 令和6年9月27日(金)～29日(日) 支援活動者数:6人

場所:輪島市大屋小学校避難所及び珠洲市上戸仮設住宅

大屋小学校では、豪雨災害により8月末で閉所になった避難所が再開。タオルや夏物衣類等の物資を提供。避難所の朝食にスープを提供。避難者数:44名



上戸仮設住宅では、プランターの寄せ植えワークショップ、アロマセラピー、茶話会を実施した。右の写真は、解体後の自宅跡地(片道2キロ)に行く高齢者夫婦に同行。避難者数:33世帯。



2. 所感

- ・矢田郷コミュニティセンターは、所長がまちづくり協議会の事務局長でもあり、受援力の高さが際立っていた。フェーズに合わせて外部支援を積極的に活用されていた。
- ・大屋小学校では、男女混合チームの自主的な避難所運営者がミーティングを重ね、避難者ファーストで女性のニーズにも対応したきめ細かな運営をされていた。豪雨災害後の避難所の再開の際には別の委託事業者が運営を担うことになり、ネットワークやノウハウの継承が途絶える課題がみえた。
- ・上戸仮設住宅では、フェーズの変化に合わせ住まいに彩りを添える寄せ植えを実施した。
- ・私たち支援活動者は一貫して、女性の目線で傾聴の姿勢でワークショップなどを行った。幼児を抱えた女性が、「引っ越ししたらと言う人がいるが、子育て中の今の生活で手いっぱい、簡単に言わないでほしい」と涙が止まらない状態だった。徐々に復旧が進む中、ひと時であっても、寄り添って傾聴することの意義と継続した心のケアの重要性を感じた。